石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第345号　平成24年7月1日発行

重要美術品　石川県指定文化財　色絵布袋図平鉢　古九谷　江戸17世紀
－古九谷の美とその流れ－

宮地寅彦　口笛
－夏休み親子で楽しむ美術館　きこえてくるよ－

－尊經閣文庫にみる－

■平清盛とその時代　【前田育徳会尊經閣文庫分館】

会期：7月19日(木)～8月28日(火)会期中無休

■古九谷の美とその流れ　【第２展示室】

夏休み　親子で楽しむ美術館

■きこえてくるよ　【第６展示室】

- 7月前半の展覧会
- コレクション展示室　主な作品
- 今月の企画展示室
- 展覧会回顧　「中国陶磁名品展 －イセコレクションの至宝－」
- この夏行ってみたい展覧会
- 企画展Topics　「須田国太郎展　－没後50年に顧みる－」
- 所蔵品紹介

前田育徳会尊経閣文庫分館

－尊経閣文庫にみる－ 平清盛とその時代

7月19日（木）～8月28日（火）　会期中無休

この特集展示は、今年のＮＨＫ大河ドラマ「平清盛」放映に合わせて、前田育徳会尊経閣文庫が所蔵する「平清盛とその時代」に関連する書跡を中心に公開します。

「祇園精舎の鐘の声　諸行無常の響きあり　沙羅雙樹の花の色　盛者必衰の理をあらわす　驕れる人も久しからず　ただ春の夜の夢のごとし　猛き者もついには滅びぬ　偏に風の前の塵に同じ」の有名な書き出しで始まる『平家物語』は、鎌倉時代に成立したと思われる、平家の栄華と没落を描いた軍記物語です。この『平家物語』に登場する平清盛や源頼朝をはじめ、保元・平治の乱、南都焼き討ち、倶利伽羅峠の戦い、壇ノ浦の戦いなどの主要な人物や事件をとりあげて展示構成するとともに、あわせてその時代を紹介するものです。

出品作品には、国宝「広田社二十九番歌合」（藤原俊成筆）や当館では初出品となる重文「仏舎利奉納願文」（九条兼実筆）などの貴重な指定文化財の公開を予定しています。（会期中展示替あり）「前田育徳会の指定文化財は、今年は何が出品されますか？」と、毎年恒例のようにお問い合わせをいただきますが、この機会にぜひご鑑賞ください。この他、『平家物語』、『保元物語』、『平治物語』、『玉葉抄』をはじめ、「待賢門合戦図屏風」（伊年印）や「平家納経」（田中親美模写）も展示しますので、大河ドラマと合わせてお楽しみください。

待賢門合戦図屏風（左隻）

第２展示室

古九谷の美とその流れ

7月19日（木）～8月28日（火）　会期中無休

「古九谷の美は、一見わかりやすそうでいて、必ずしもそうではないのだ。柿右衛門には甘美な情調とともに、その色にも線にも眼に直ぐ受入れられる感覚的秩序がある。古九谷にはそういう甘美な情調も感覚的秩序もないばかりか、自由な意匠と奔放な色の配置にはどこかに硬質なものが感ぜられ、それが最初は抵抗を呼ぶのだ。やがてその美の世界に入り込むと、それは汲めども尽きぬ豊かさと、いつまでも手応えのある強さとして、われわれの心を捉えて放さぬものとなるのだが。それを私は美の高さと呼ぼう。美の高さには鑑賞者も一挙には至り得ないのだ。古九谷はその美の高さをもっているのである。」谷川徹三「古九谷の美」（集英社『古九谷』昭和四十六年所収）より原文のまま引用。

谷川徹三氏（一八九五～一九八九）は、哲学者ならではの深い洞察をもって古九谷の本質を見事に捉えています。この「美の高さ」こそが、色絵磁器という日本の新たな美術ジャンルに挑んだ加賀藩三代藩主前田利常が目指したところだったのではないでしょうか。

この精神は、先の特集でご紹介した加賀蒔絵にも如実にあらわれています。このように、古九谷は加賀藩の文化政策、特に文化によって天下一を目指した利常の気概なしには誕生し得なかったものであり、この精神が再興九谷以後今日まで、作家たちを鼓舞し続けています。今回の特集では再興九谷諸窯の代表作とともに、その軌跡をたどります。

石川県指定文化財
青手桜花散文平鉢

第６展示室

夏休み　親子で楽しむ美術館

きこえてくるよ

7月19日（木）～8月28日（火）　会期中無休

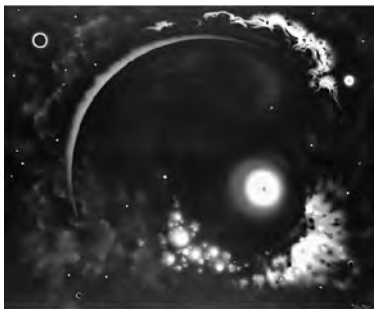
『きこえてくるよ』の展示室、何がきこえてくるのでしょう。

この展示室は音や声などに注目していただく展示です。しかし、作品自体から音を発しているわけではありません。作品を鑑賞される皆さんが作品から音や声を感じたり、想像したり、また、発見したりしながら見て頂く展示室なのです。

展示室で作品をじっと見つめ、その作品があらわしている世界に身を置いてみてください。雨の降る音がきこえる作品や、鳥のさえずる声がきこえてくる作品があるかもしれません。そんな音探しをしてみると、最近では聞くことが少なくなった音にも気づいて頂くこともできるかもしれません。人物の描かれている作品では、作品の中の人がどんなことを話しているかセリフを想像して見てみましょう。また、人間ではない生き物などが表現されている作品でも、セリフを考えてみることは楽しく鑑賞できるきっかけになることでしょう。そして、何を表しているかわかりにくい抽象的な作品も、例えば擬態語などの音で表してみてみることは、作品を違った観点でみることの体験にもなることでしょう。

音を発しているわけではない作品から、皆さんのそれぞれの感じる心を通して音なき音をきいてみる。難しく考えがちな美術作品の鑑賞も、こんな観点なら小さいお子さんから楽しんでいただけることでしょう。夏休みのひととき、この展示室をご家族やお友達でご一緒に見ていただき、「私はこんなふうにきこえたよ」「私はこうきこえてきたよ」とそれぞれの感じた音が違う場合があることも知ることで、またひと味違った美術鑑賞の楽しみ方を、是非味わってみてください。

坂根克介「占」



棚瀬修次「Black Space in かたち」

学芸員の眼

県下の学校に所蔵作品を持って行き、鑑賞授業をする「学校出前講座」。その中でゲーム方式を取り入れて自然に作品に親しむことができるアートゲームの活動を行っています。そのアートゲームの中の一つがこの「きこえてくるよ」の展示室のように作品から音を感じてもらう活動です。展示会場の作品の中から、子どもたちそれぞれが一つの作品について自分が感じた音やセリフを皆の前で発表。これをクイズにしてどの作品のことか皆で考えます。皆がすぐわかる音もあれば「あの作品？」「この作品？」と意見がわかれる音もあります。この活動、「人の感じる心はそれぞれちがう」ということを感じてもらえるよいきっかけとして、出前講座における導入の定番の活動にしています。

前田育徳会尊経閣文庫分館

百万石大名の装い
ー甲冑・陣羽織ー

恒例の展覧会ではありますが、昨年より「軍装図録」を展示することで、実物作品では見えにくい部分の補足説明として、また制作当初に近い色合を紹介しております。見えにくいと言えば、陣羽織の裏に注目いただきたいと思います。「日の出に立波文」の陣羽織は代々踏襲されておりますが、裏地を見ると、錦や金襴、ビロードなど豪華な裂地が使用され、そこに各藩主の好みが明確に示されているといえます。こうした見えにくいところに凝るという心憎い美意識が、日本美の特徴ともいえましょう。五代前田綱紀所用の「蒔絵蝶鮫文陣笠」にも内側に朱漆を用いるなど、その美意識が反映されています。

日の出に立波文陣羽織　五代前田綱紀所用

第５展示室

染める絵画
ー成竹登茂男・堀友三郎ー

金沢の風物詩の一つとされている友禅流し、これは染めの工程上、欠かすことのできない「洗い」です。素地の布に多彩な表現を施すには、糊や蝋（ロウ）を用いて染め分け、媒染剤で色を定着させて、さらに水洗いを幾度も繰り返すなど、多くの工程が必要となります。素材の性質とそれに応じた技法を研究し知り尽くした、成竹登茂男、堀友三郎の二作家が生み出した作品群は、布に図柄を染めるという、古代から受け継がれた表現そのものの、可能性を問いかけてきます。描かれた図柄だけでなく、素材の質感を一緒にお楽しみください。

成竹登茂男「夕映」

7月前半の展覧会　6月14日（木）～7月16日（月・祝）会期中無休

今回は、長谷川等伯が信春と名のって能登を拠点に活動していた時代の最も初期と考えられる「藤原長谷川信春廿六歳」との墨書がある、「十二天図」（石川県指定文化財・正覚院蔵）がすべて公開されています。等伯の二十六歳は永禄七年（一五六四）にあたり、ちょうど織田信長が勢力を伸張してきた時期と重なります。武力ではなく絵筆で天下を夢見た等伯の意欲が漲る「十二天図」を、どうぞご堪能ください。そしてこの作品、現在日本を巡回しているボストン美術館蔵の等伯筆「龍虎図」と意外な接点もありますよ。

長谷川等伯　「十二天図」より梵天

第２展示室

長谷川等伯とその周辺

今様絵合（いまようえあわせ）と題した本特集。古来宮中の遊びでは競い合うことを意味した「合わせ」ですが、本特集では勿論対決を意味するものではありません。複数の作品を合わせて鑑賞することで、新たな視点を提供しようとする試みです。今様は「近現代作品」の意味あいと「新しい絵合」の意味あいを持たせました。「いかにも」という絵合（えあわせ）から、「どうして？」と首をかしげたくなる絵合まで、様々な絵合をご覧いただき、「わたしならこうする」という視点を持って頂けたら幸いです。

北野恒富「雨後」

第６展示室

今様絵合（えあわせ）
ー近現代日本画に遊ぶー

第8・9展示室

2012 北陸二紀展

7月19日(木)～23日(月)　会期中無休

二紀会は「類型化を排する。具象・非具象を論じない。創造的な個性の発現を尊重する。情実を排し新人を抜擢し、積極的に世に送る」の主張を掲げて昭和二十二年以来活動を続けています。

北陸二紀展は春の北陸二紀展に続き北陸支部会員が、第六十六回二紀展に向けて制作した作品を展示いたします。同時に企画として加賀市出身栃木県在住、二紀準会員株田昌彦氏の作品を展示いたします。二紀会にて損保ジャパン美術財団奨励賞他を、現代美術展にて美術文化大賞委嘱賞を受賞等活躍中です。

◆入場無料

◆後　援／北國新聞社　テレビ金沢　北陸放送

◆連絡先／金沢市泉野出町二・六・九　六反田英一
電話〇七六－二四三－〇八八二

七月の企画展示室

日本画を志すものが、これまでの既存的概念や会派にとらわれることなく、自由で新しい発想によりそれぞれの日本画制作をすることを目的とし、会員相互の協力によってその研究・模索と石川県内での発表の機会を設け、自己の研鑽に努め、石川県の美術文化の発展に寄与する。」とし、新たな日本画の会をスタートして今年で三年目になりました。

二十代の若手からベテランまで年齢層は幅広く、モチーフも風景や静物、人物・動物や植物、具象から抽象など多岐にわたり、その視点や表現方法は個性豊かです。

ぜひ、この機会に石川県内の日本画家の意欲作をご覧ください。

◆入場無料

◆連絡先／輪島市鵜入町二－三十七
石川県日本画会事務局長　宮下和司
電話〇七六八－二二－七一四二

第7展示室

第3回 石川県日本画会展

7月19日(木)～23日(月)　会期中無休

7月後半からのコレクション展示室

主な展示作品

7月19日(木)～8月28日(火)　会期中無休

日本画・油彩画・彫刻
水彩・素描・版画

【日本画】
石川　義「南湖のたなご達」
稲元　実「夏日」
西山英雄「火焔山」

【油彩画】
庄田常章「ゾフNo.2」
三浦　泉「残された刻」

脇田　和「連理」

【彫刻】
吉田三郎「山羊を飼う老人」
高橋　清「人とトラロック」
宮崎豊治「身辺モデル
ー類似化ー」

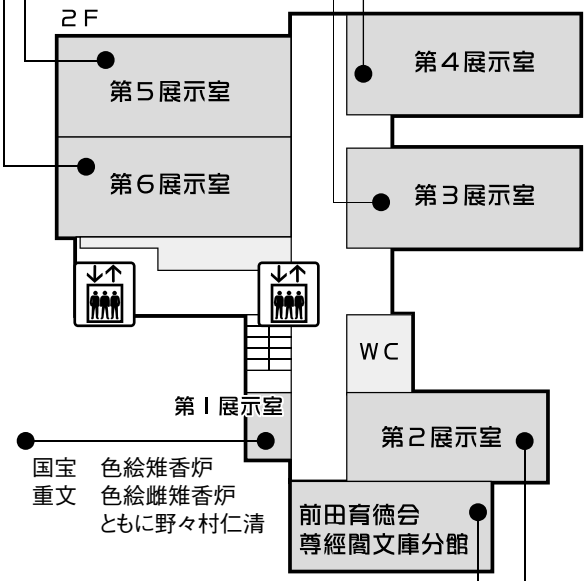
【水彩・素描・版画】
宮本三郎「舞妓十二題蟲籠」

夏休み
親子で楽しむ美術館
「きこえてくるよ」

近現代工芸

北出不二雄「薄明円匣」
小松芳光　「噴水屏風」

十二代宮崎寒雉
「柏葉文釜　初代寒雉写」



国宝　色絵雉香炉
重文　色絵雌雉香炉
ともに野々村仁清

古美術
「平清盛とその時代」

古美術
「古九谷の美とその流れ」

展覧会回顧

中国陶磁名品展 －イセコレクションの至宝－

「幻のコレクション　中国陶磁名品展－イセコレクションの至宝－」は、四月二十二日から五月十三日までの二十二日間の会期でしたが、四月二十三日の記念式典には高円宮妃殿下のご来臨を賜り全国的な注目を集めたことと、会期がゴールデン・ウィークとも重なり、また当館のみの開催だったことで、当初の目標を大きく上回る約七千人の来場者を迎えることができました。また展覧会図録も、ちょうど最終日に完売という理想的な形で終了することができました。

今回の展覧会は、「幻のコレクション」の言葉どおり重要文化財「青磁鉄斑文柑子口瓶」が、東京国立博物館で公開されて以来およそ半世紀ぶりに公開されたほか、初公開となった北宋時代の「青白磁瓜形水注」については、国内に所在する同種のいずれの作品にも勝る洗練された美を醸し出している作例が確認されたことで、来場者から「まさに国宝級」と賛嘆されるなど、知られざる名品の存在を明らかにする絶好の機会となりました。また今回は、展覧会の準備から展示までを美術商の方々と共同で行いました。作品の取り上げ方など、通常と異なる視点から意見を交換できたことは有益でした。

最後に、本展開催に多大なご尽力をいただきました伊勢彦信様、イセ文化基金、イセ文化財団、そしてご後援を賜りました北國新聞社、朝日新聞社、中華人民共和国駐日本国大使館、そして関係各位に改めて感謝申し上げます。

この夏行ってみたい展覧会

新潟県立近代美術館
「地上の天宮　北京・故宮博物院展」
7月3日（火）～8月5日（日）
国家一級文物を含む名品約二百点を展示。
新潟県長岡市千秋　電話／0258－28－4111

東京都美術館
「マウリッツハイス美術館展　オランダ・フランドル絵画の至宝」
6月30日～9月17日
フェルメール「真珠の耳飾りの少女」来日。
東京都台東区上野公園　電話／03－3823－6921

山種美術館
「福田平八郎と日本画モダン」
5月26日（土）～7月22日（日）
代表作「漣」「雨」など平八郎作品約二十点を含む七十点の展示。（展示替え有り）
東京都渋谷区広尾　電話／03－5777－8600

名古屋ボストン美術館
「ボストン美術館　日本美術の至宝」
前期：6月23日（土）～9月17日（月・祝）
後期：9月29日（土）～12月9日（日）
五十万人以上を集客した東京展が名古屋に。見逃した方は必見。
名古屋市中区金山町　電話／052－684－0101

京都国立近代美術館
「KATAGAMI Style －もうひとつのジャポニスム」
前期：7月7日（土）～7月29日（日）
後期：7月31日（火）～8月19日（日）
様々なジャンルの作品約四百点で見る、型紙によるジャポニズム。
京都市左京区岡崎円勝寺町　電話／075－761－4111

企画展Topics

須田国太郎展 －没後50年に顧みる－

会期：9月1日(土)～10月14日(日)　会期中無休　　主催：石川県立美術館

須田国太郎は明治二十四年京都市生まれ、京都帝国大学で美学・美術史、関西美術院でデッサンを学んだ後スペインに留学し、ルネサンスやバロック絵画を学びました。帰国後は西洋絵画を基礎に日本独自の油絵を求め、幽玄な作品を独立美術協会に発表し、日本洋画を代表する画家の一人として活躍しました。「犬」や「法観寺塔婆」など動物や社寺を描いた作品は見るものを魅了してやみません。

京都生まれの洋画家といえば梅原龍三郎と安井曾太郎、この二人が須田の三歳年長で、よく名があがりますが、須田もけっして後塵を拝するものではありません。画家としか言いようのない二人に対し、須田は美術史家であり画家であった点に違いがあります。京都帝国大学でバロック絵画について講義するなど、通常の画家にはまずないことです。また日本の洋画家の多くがパリで印象派以降のスタイルを学ぶのに対し、須田はもっと前にさかのぼり、ルネッサンスからバロックを研究し、なかでもヴェネツィア派のティツィアーノやティントレットをプラド美術館で模写し、理論と実技を学んだのでした。作風の重厚さは、こうしたヨーロッパ古典絵画の研究を基盤に、西洋と東洋の美の総合と超克を目指して築いていったもので、日本の洋画家として独自の位置を占める特筆すべき画家であったといえます。

須田国太郎

今年も百万石の文化講座開講

平成二十一年より、前田育徳会や尊経閣文庫を広く知っていただくために開講した「百万石の文化講座」。先日同封したお知らせの通り、今年は全三回の予定で、三名のスペシャリストに講演していただきます。※第一講の詳細は左記の通り

七月の行事予定

■土曜講座　午後1時30分～　美術館講義室　聴講無料		
7月7日(土)	石川県の陶芸	南　俊英　学芸主幹
7月14日(土)	須田国太郎と石川	二木伸一郎　普及課長
7月21日(土)	平安の美　截金 人間国宝　西出大三の求めたもの	寺川　和子　学芸主査
■百万石の文化講座　午後1時30分～　美術館ホール　聴講無料		
7月1日(日)	第一講　「前田利長・利常と前田氏庶子の命運 －前田利好・知好・直之－」 講師　見瀬　和雄　金沢学院大学教授	

ミュージアムショップ通信

先日県外からのお客様より、石川県の国宝の数を尋ねられ、「二点です。」と答えると「加賀前田家なのに？」と驚いたご様子。全て東京の前田育徳会に所蔵されている旨を伝え、納得して頂きました。前田育徳会は国宝二十二点、重文七十六点を含む多くの文化財を所蔵し、その一部は当館の尊経閣文庫分館でご覧いただいております。只今、前田育徳会所蔵の国宝を紹介する図録がシリーズで好評発売中。詳しくてわかりやすい図録を是非手に取ってみて下さい。

左から「宝積経要品」「万葉集」「土佐日記」「名物大典太 名物太郎作正宗 名物富田鄉」各840円

石川県指定文化財　色絵鶉草花図平鉢　いろえうずらそうかずひらばち　所蔵品紹介226

古九谷　江戸17世紀　口径30.6、高さ7.0、底径18.6cm

古九谷の意匠は、その大胆さが目を引きますが、意匠そのものが持つ伝統的な意味も忠実に踏まえていることにも注目したいと思います。本作は、見込中央に二羽の鶉が描かれています。野々村仁清作、重文「色絵雌雉香炉」のように二羽のうち一方が後ろを振り向く姿態で描かれる場合は、つがいと考えて間違いありません。

さて鶉は中国では鶺鴒（あんじゅ）と呼ばれ、鶺が安と同音であることと、多産の鳥ともされていることから、吉祥画の画題としてしばしば取り上げられました。特に北宋時代末からの院体花鳥画に優れた作品が多く残されています。本作は、多くの実を結ぶ稲科の植物がつがいの鶉に添えられていることから、そうした歴史的背景を熟知した画家が絵付を行ったものと考えられます。そして土の盛り上がりを黄、青、緑、紫と地層のように色を重ねて描き分ける手法は、やまと絵に多く見られる特徴であることから推して、この作者は、中国の画題に通じたやまと絵系の画家の可能性が高いようです。

口縁部には、中国明時代の中期頃に始まる漆工の一技法である存星（ぞんせい）を模したような七宝繋文と四方襷文があしらわれています。そして裏面には染付の牡丹唐草がめぐらされ、高台内には二重の圏線と二重角の「福」字が記されています。本作は、第二展示室でほぼ常時鏡台に載せて展示されていますので、裏面の様子や、真横から見た素地のゆがみなども再発見していただき、古九谷の「美の高さ」の一端に触れていただければ幸いです。

ミュージアムレポート

五月三十日（水）午後、平野博文文部科学大臣が来館し、約一時間かけて国宝色絵雉香炉、古九谷、前田育徳会展示室を鑑賞しました。

次回の展覧会

企画展示室

孤高の画家
田中一村展

7月28日(土)
～8月26日(日)

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　350円（280円）
大学生　280円（220円）
高校生以下　無料
※（　）は団体料金
毎月第1月曜日はコレクション展示室無料の日（7月は2日）

7月の開館時間
午前9：30～午後6：00

カフェ営業時間
午前10：00～午後7：00

7月の休館日は
17日（火）・18日（水）

広告
明治10年8月、加賀藩 前田家の出資により創業。
金沢支店　〒920-8686　金沢市南町5-28　TEL.076-263-5131
www.hokugin.co.jp
お客さまの「うれしい」を、私たちの「うれしい」に。北陸銀行

石川県立美術館だより
第345号（毎月発行）
2012年7月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています